

古代国分寺の謎

令和8年(2026)3月1日(日)に、原始・古代・中世部会の部会長である荒井秀規氏を講師に迎え、「古代国分寺の謎」と題した講演会をリオンホールにて行いました。ここでは、講演内容の一部や当日の様子をご紹介します。

「国分寺」と呼ばれるのはいつから？

国分寺建立の詔(741年発布)には、「国分寺」という語はなく、僧寺を「金光明四天王護国之寺」、尼寺を「法華滅罪之寺」と記していました。天平14年(742)の大和国城下郡司解の「国分寺」という語が、実質的な初見となります。



講師：荒井秀規 氏(国分寺市市史編さん推進委員会 原始・古代・中世部会長／明治大学兼任講師)

国分寺の組織と役割は？

僧寺は、在地で採用される国分寺僧(終身雇用)と、中央から派遣される国師(講師)・読師で構成されます。

国分寺では、鎮護国家のための法会や仏教に基づく地方統制を担っていました。また、国内の寺院・僧侶の管理や養成も行い、国分寺僧に欠員が出ると、在地で新たに養成・得度させて採用しました。他にも窮民救済や、土木工事・医療を施すなど、社会事業の中心的な機能も有していました。

「国分寺」の本尊仏は？

鎮護国家の思想のもと、建立当初、僧寺は釈迦如来、尼寺は阿弥陀如来を本尊としていましたが、9世紀になると薬師如来を本尊としている記述が各国の文献史料でみられようになります。薬師如来は、個人救済や現世利益を与える仏です。本尊の変化から、国分寺が国家の寺から民衆化・一般寺院化していったことがうかがえます。



主催者を代表して、坂詰秀一氏(国分寺市市史編さん推進委員会副委員長、立正大学特別栄誉教授)にご挨拶をいただきました。

古代の国分寺について文献史料から読み取れる内容だけでなく、考古学の成果も踏まえたご講演でした。230名を超えるお申込みがあり、当日多くの方にご参加いただきました。

現在、原始・古代・中世部会では、部会長の荒井氏を中心に文献史料や考古遺物を集成した資料編の作成を進めています。刊行までの間も、こうした普及事業や本誌面等を通して、活動の成果を逐次発信していきます。(木村 遊)

国分寺市史編さん News Letter 第5号 令和8年(2026)9月30日発行

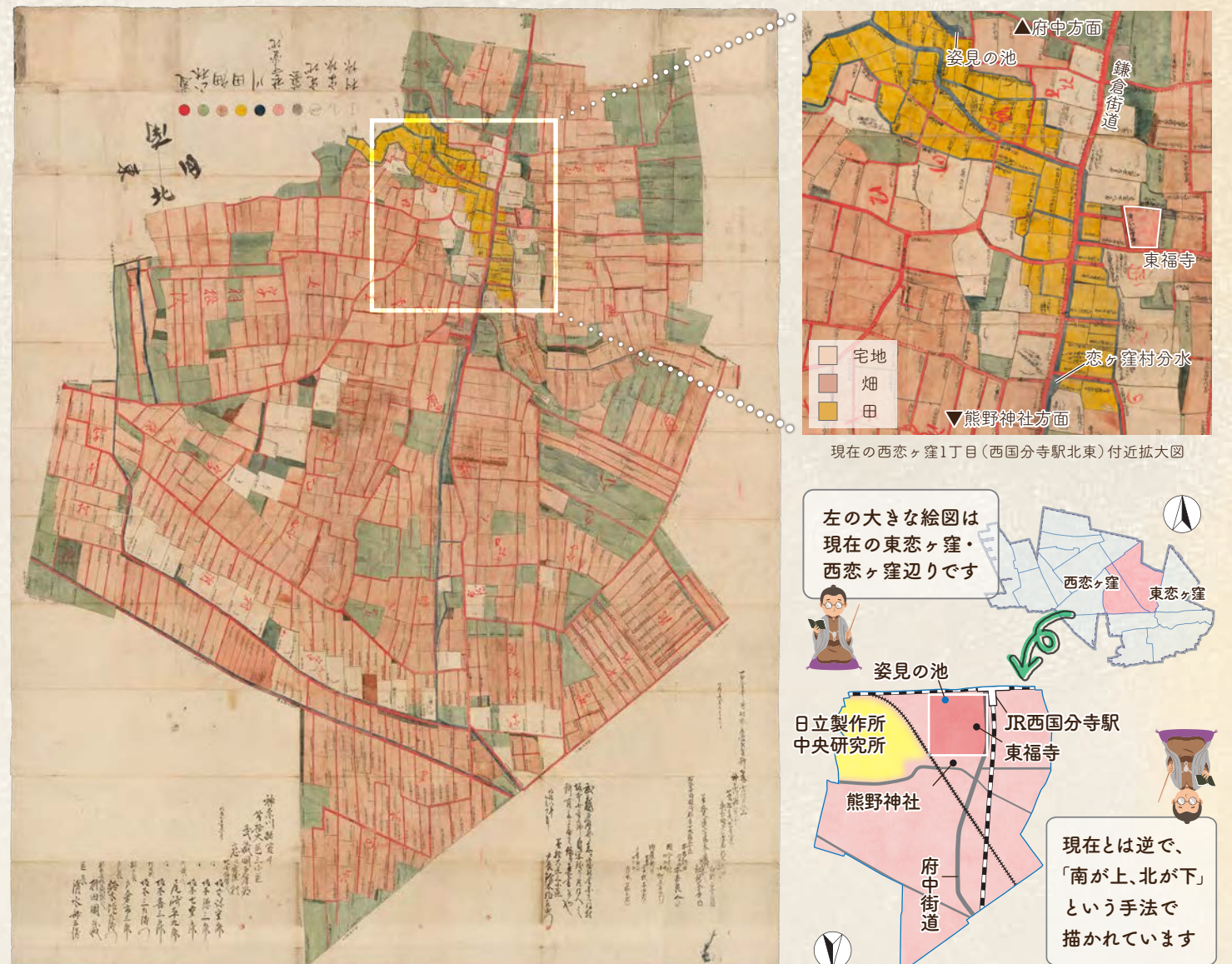
編集・発行：国分寺市教育委員会市史編さん室

〒185-0034 東京都国分寺市光町1-46-8 ひかりプラザ5階 電話：042-571-7815

News Letter

2026
9月30日
発行
Vol.05

約30年ぶりの再発見 明治初頭の恋ヶ窪村を描いた 巨大な絵図



恋ヶ窪村地引絵図 明治8年(1875)10月 写 坂本準之助家文書

この絵図は前回の市史編さんの際に調査し、所蔵者へお返しした史料ですが、約30年ぶりに訪問したことで再発見となりました。縦3m、横2.5mの大判の地図ですが、大きな損傷やカビもなく、所蔵者が長年大切に保管していたことがうかがえます。

これは恋ヶ窪村の土地利用の様子や地番を記した絵図で、明治7年(1874)の地租改正時に作成した図を写したものと考えられます。翌年9月に、本多新田など近隣村の役人が「境界に相違ない」と確認を行い、10月にこの写しが作成されました。

絵図の色分けに着目すると、畑を示す橙色が面積の多くを占め、用水や道に沿って宅地が並んでいます。一方で、南側には黄色に塗られた田んぼがあり、谷地を利用して稲作を行う、市域でも数少ない地区でした。作成から約150年が経ち、現在は多くが住宅地となり用水も暗きょ化されましたが、絵図は当時の面影を鮮やかに伝えてくれます。(木本 和志)

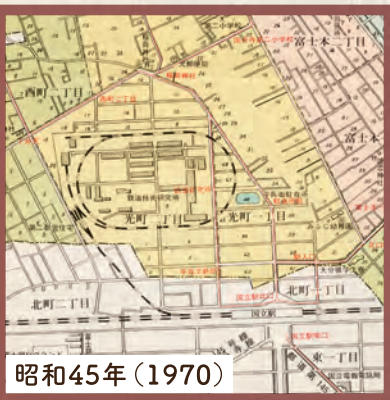
地図で見る 国分寺市の 今と昔

国立駅北側



昭和28年(1953)

鉄道技術研究所(現在の鉄道総合技術研究所)が建設される前で、人家もまばらでした。



昭和45年(1970)

昭和34年(1959)に移転した鉄道技術研究所が描かれ、研究所内には線路が環状に敷設されていました。



平成31年(2019)

鉄道総合技術研究所内の線路が環状ではなくなり、ひかりプラザ(平成6年(1994)オープン)などの施設が見えます。

西国分寺駅周辺



昭和28年(1953)



昭和45年(1970)



平成31年(2019)

下に示した国分寺市全図は、市制施行後の昭和45年(1970)4月に作成されたものです。現在と大きく変わらないように見えますが、昭和28年(1953)の町全図、平成31年(2019)の市全図と比べるとその時代のまちの特徴が見えてきます。

国分寺駅南口



昭和28年(1953)



昭和45年(1970)



平成31年(2019)

【左上】当時の国分寺駅は北口しかなく、南口は昭和31年(1956)に開設します。また、昭和41年まで、駅の南側に第一小学校がありました。

【右上】昭和45年(1970)の地図には南口が描かれており、多摩川から砂利を運んだ下河原線のホームも見えます。

【下】国分寺駅にターミナルビルが建設され、南口を東へ進むと都立殿ヶ谷戸庭園(随宜園)(昭和54年(1979)開園)があります。

ここで紹介した以外にも、様々なまちの変化があります。みなさんも地図や絵図から身近なまちの変化を探してみてください。

市史編さん室では、江戸時代から現代にかけて残された地図や絵図を紹介する地図・絵図編の刊行を目指しています。この地域がどのように成り立ってきたか、どういった特徴がある地域なのかを視覚的に捉えられるものとなることを目指して調査・研究を進めています。

(宮川 展夫)